

東京バッハ合唱団 月報

[第 585 号] 2011 年 3 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 郵便振替：00190-3-47604
Tel：03-3290-5731 Fax 専用：03-3290-5732
mail: bachchortokyo@aol.com http://www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.585

March 2011

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

J. S. Bach (ヨーハン・ゼバスティアン) と C. P. E. Bach (カール・フィーリップ・エマーヌエル)

バッハ父子の息吹に触れる

新バッハ全集《口短調ミサ曲》の改訂版

大村 健二

《口短調ミサ曲》の練習が 2 年目を迎えています。合唱団の公演記録をみると、20 年前の創立 30 周年記念の年には、前年から 2 大曲の練習にとりかかって、4 月に《ヨハネ受難曲》を上演し、12 月に《口短調ミサ曲》に臨んだのでした。それに比べると、年明けまでは、前回定演の曲目との並行練習だったとはいえ、今回はずいぶんたっぷりとした準備期間に思えます。もちろん、この大曲に臨むのに、たっぷりすぎるということはありません。

昨年の春に「新バッハ全集」の改訂版が刊行されました。「新全集」は、東西ドイツの分裂の時代に、西はゲッティンゲン、東はライプツィヒの両研究機関が編纂事業を共同して継続し、発刊以来ほぼ半世紀を経てようやく 2008 年にその大事業を完結させたのでした。時はドイツ統合から 20 年がたとうとしていました。それが、ほど経ずしての改訂版発刊であり、バッハ研究の旺盛さが推察されます。

この改訂第 1 巻が《口短調ミサ曲》でした。従来の「新全集」の《口短調ミサ曲》の扉をみると、1954 年の出版とありますから、これもまた半世紀以上が経過しているわけですが、この版は、発行当初から多くの議論に取り巻かれていたことはご存知のとおりです。すなわち、バッハの「口短調ミサ曲」という 1 曲のまとまった音楽は存在しない、という観点で編集されていたのであり、当合唱団の歴代の団員たちも、正式には『ミサ - ニケア信経 - サンクトゥス - オサンナ、ベネディクトゥス、アーニウス・デイ、ドナ・ノビス・パーチェム (後にいわゆる *später genannt*: 口短調ミサ曲 BWV 232)』という、煮え切らない題名のついたヴォーカルスコアをもって公演に臨んだものでした。もちろん、認識としては、その後の研究者たちのおおたの合意のごとく、バッハは晩年に至って、上記の諸部分を 1 曲の完全ミサとして構築し直した、という立場で演奏していましたが。

そして、このたびの 50 周年記念企画でも、私たちは従来の楽譜をもって練習を開始しました。そこへ改訂版のニュースです。歌う部分が膨大でかつ技巧的な曲が多い

のは承知のうえとしても、すでに宣伝しているとおり、今回は合唱団としても初の日本語上演ですから、先の「煮え切らない」タイトルの楽譜 (総ページ数 240 頁) に、各自が日本語歌詞を書き込むという、バッハ当時と同じ労力の作業が並行しています (先見の明ある出版社が、訳詞つきの《口短調》楽譜を作ってくださいと良いのですが。ビルが建ちますよ!)。きわめつきは、訳詞のたび重なる改訂であり、容赦がありません。複数声部のかさなりや動きを実際に耳で聞いた段階で、歌詞割りを修正する必要が生じるのは当然ですから、訳詞者 (兼・指揮者) からつぎつぎに新しい指示が出ると、ウツと息を呑みます。そこへ改訂版のニュース。

指揮者 (兼・訳詞者) は、改訂版全集をみて、ただちに、この版の採用を決定しました。改訂の詳細は別の機会にゆずりますが、表題を、きっぱりと『口短調ミサ曲』としたことに象徴されるとおり、改訂版編纂委員会としては、この間の議論に結論をくださったこととなります。残された各部分の自筆の総譜やパート譜、筆写譜、それぞれの写真資料などを、この結論にたつて、最先端の知見と技術を駆使しながら見直したことが、全集の前書きや巻末の校訂報告書から読みとれます。

全集本体の改訂にともなって、ヴォーカルスコアも昨年末に改訂版が出版されました。選択肢は二つに一つ。改訂版を買いなおして、日本語歌詞の書き込みに再度、挑戦するか、あるいは、改訂箇所を修正しつつ従来版を使いつづけるか。合唱の一員の立場からみて、後者に物理的な無理はなさそうです。そして何よりも、根気よくこの修正作業を施すことによって、じつに興味深いことながら気づくこととなります。

資料を継承した息子バッハ (カール・フィーリップ・エマーヌエル) が後に手を入れた部分 (父バッハの手になるテキストの誤字脱字の補正から、演奏に際しての指示の書き込み、スラー・タイなどの器楽法や音程の変更、小節まるごとの削除や再挿入にいたるまで) をとり除いて、元もとの父の筆跡を甦らせる、という作業が大きなウエイトを占めたようですが、息子の書き込み、それを

バッハ合唱団をとりまく人々

[第 2 回]

大村 恵美子

定期演奏会でご協演いただいた独唱者、独奏者、オーケストラの方々には、何よりも先に感謝しなければなりません。声楽・器楽の両面で、よく事情を知られた数人の方々、TPO を細かくおもんばかってくださって、毎回すばらしいメンバーを集めてくださいました。今回はそのうち、独唱者をご紹介します。

105 回定演（2011 年 1 月 9 日）までにご登場いただいたソリストは、ソプラノ 21 人、アルト 10 人、テノール 17 人、バス 15 人、計 63 人という大変な数の方々です。

なかでも 10 回以上出演の方は、

<ソプラノ>

名古屋木実さん：17 回（1982 年 1995 年）

光野孝子さん：26 回（1995 年 2011 年）

<アルト>

戸田敏子さん：37 回（1963 84 年）

佐々木まり子さん：36 回（1983 2011 年）

田中奈美子さん：16 回（1986 2002 年）

<テノール>

板橋 勝さん：22 回（1963 80 年、2004 年歿）

佐々木正利さん：27 回（1978 2005 年）

佐伯雅巳さん：10 回（1981 2007 年）

平良栄一さん：13 回（1991 2006 年）

<バス>

芳野靖夫さん：14 回（1963 76 年）

渡邊 明さん：39 回（1973 2007 年）

宇佐美桂一さん：23 回（1982 2005 年、2007 年歿）

といった顔ぶれであり、私どもの演奏のスタイルや質を、一緒になって作り上げてくださった面々でもあるわけです。

なお、1 回でも出演なさった方々も、それぞれ語るにつけないほどの思い出があるのですが、ここには収容しきれませんので、残念ながら今回はお名前だけにとどめます。

<ソプラノ>（上記の方々を除く、敬称略。以下同様）

三宅春恵、有賀喜見子、中沢 桂、瀬山詠子、北野寛子、砂村美智子、大川隆子、川野博子、加藤綾子、市田キヨ子、秋山恵美子、常森寿子、朝倉蒼生、中村邦子、豊田喜代美、中田順子、山田綾子、日比吉子、曾根榮子

<アルト>

木村宏子、中村浩子、伊原直子、戸嶋由美、中山洋子、奥本とも、加納里美



洗い出す研究者たちの目、浮かび上がってくる父バッハの音符とテキスト、これらに、われわれ自身の修正作業が加わり、さながら、晩年のバッハの卓上から 260 年後の今が一直線につながって、みんなでわいわい言いながら、真実の《口短調ミサ曲》を作りあげているような一体感が生じているのでした。

たとえば、1786 年ハンプルクでの *Symbolum Nicenum*（「ニケア信経」）の演奏に際し、息子エマーヌエルはさまざまな修正・書き込みをしましたが、今それらを取り払いつつ、「おい、それはダメだ」という親父の声を聞いているような気がします。息子からも、「ここはこのように演奏した方が今風...」という声が返ってくるのは言うまでもありません。微細な修正のひとつまから、18 世紀後半の、音楽の趣味のうつりゆきが感じられるような気がして、こんな貴重な経験は、まあ、禍い転じて福となす、というところでしょうか。（団員）

上の写真：「ニケア信経」*Symbolum Nicenum* 自筆総譜の第 6 曲主は甦りたもう *Et resurrexit*（改訂版 Nr.15）の 95 - 99 小節（「新バッハ全集」改訂版収載のファクシミリ 4）。上から 4 段目がソプラノ I，以下ソプラノ II，アルト，テノール，バス，通奏低音の順。

エマーヌエルが相続したこの楽譜は、彼の手による何度かの修正のために変色し、欠損も生じているが、科学を駆使しての解析が功を奏したようだ。下の余白に見える書き込み（アルトの 98 小節 *finis non erit* 部分）もエマーヌエルによる。

<テノール>

石井昭彦、唐津東流、篠崎義昭、鈴木 仁、川瀬柳史、入江 進、鈴木寛一、市原多朗、永田峰雄、石井健三、前田孝一、鏡 貴之、鳥海 寮

<バス>

池田明良、木村文男、吉江忠男、佐浦国雄、原田茂生、淵脇和範、池田直樹、水野賢二、佐々木直樹、河野克典、小原浄二、新見準平

わが国の、20世紀後半の音楽界を担った方々のお名前と重なります。オールドファンには懐かしい壮観でしょう。

：名古屋木実さん(左)と田中奈美子さん(右)



：宇佐美桂一さん[故人]

上の2枚は創立25周年記念公演《口短調ミサ曲》のリハーサル風景 1987年



：戸田敏子さん
野尻湖合宿 1966年。改築前の野尻湖ハウスのテラスにて

：写真中央・板橋勝さん[故人]。仙台客演で松島観光 1964年。合唱団創立2年目の若々しい顔ぶれに囲まれて。

前列左から、仙台での受け入れにご尽力くださった藤井康治さん(東北大学名誉教授、森井夫人幸子さんのご父君、2003年歿)、長谷川朝雄さん(指揮者)、板橋さん、木村文男さん(バス)。後列左から、峰尾昌男さん(元団員)、森井眞さん(団友、第1回で紹介)、国吉三郎さん(元団員)、加藤剛男さん(団員)、堀聖さん(元団員)



後援会会計報告 2010年度(1月 - 12月)

2010年度	1月 - 6月	7月 - 12月	全期
収入			
後援会費	427,000	641,000	1,068,000
寄付金	79,500	151,000	230,500
収入合計	506,500	792,000	1,298,500
支出			
事務局費補助	420,000	420,000	840,000
渉外費	15,000	30,000	45,000
通信費	276,895	265,965	542,860
事務費	55,605	70,814	126,419
雑費	0	0	0
支出合計	767,500	786,779	1,554,279
当期収支差額	-261,000	5,221	-255,779
前期より繰越			-393,528
累計			-649,307

2010年度後期(7月-12月)(敬称略)

【継続会員】高野 京子 福中 脩 市川 義和 福井土志郎
 吉田佐貴子 島 正孝 高橋美千子 谷沢 守 吉村 雅典
 神田 弘子 松原 誠 小沼 紘美 青田 健 大倉 正彦
 野村 明子 康 美洋子 川戸 龍夫 恒松 恭子 出口 禎子
 小口 幸成 笠原 維信 務台 孝尚 黒田みつ子 箕浦 正敏
 荻津 雅夫 澤田 望 高村 明子 丸山 真人 阪根 隆司
 小久保基子 本郷 容子 渡辺さち子 武藤 京子 高田 功二
 加藤 道子 鈴木 郁子 野本 哲雄 田中 玲子 布施 靖子
 【新入会員】宮城 幸義
 【寄付】菅間 五郎 鈴木 敬子 加藤 剛男 菅原 文子
 猪狩 恭子 阪根 隆司 田中 玲子 武藤 京子 関 純子
 福井土志郎 山本 栄子 持田 勝 中山 靖子
 【切手多数】声の奉仕会マリア文庫

東京パッハ合唱団 <創立50周年記念ファンド> 報告 (2011年2月20日現在)

- ・目的：団運営の安定を図り、創立記念事業を助成する
- ・基金の目標額：500万円
- ・募金単位：1口10,000円 × 500口
- ・募金期間：2011年1月から2014年12月

募金達成額：600,000円(応募人数：27名)

・郵便振替：口座番号 00190-3-47604、東京パッハ合唱団
 (「記念ファンド」とお書き添えください)

新刊のご紹介

森野 善右衛門 [著]

『明日への教会 聖霊と信徒の世紀を開く』

大村 恵美子

2010年12月25日にキリスト新聞社から発行されたばかりのこのご本を、森野先生は、去る1月9日の第105回定期演奏会に来聴され、開演前の楽屋で、私にお手渡ししてくださいました。

ボンヘッファー研究会で毎月お会いする機会のある先生と私は、ほぼ同世代に近い(1928年のお生まれで、私より3年先輩)。早くから、ディートリッヒ・ボンヘッファー(ヒトラー暗殺計画に加担して処刑されたドイツ・ルター派の牧師・神学者。獄中での著作は、今日の世界のキリスト教界に大きな影響を与えている。1906-1945)の専門家として、その翻訳も多く残していらっしゃいますが、私のバッハ音楽の演奏会にも、たびたび足を運んでくださって、暖かく大きな応援をつづけてくださっています。

この新著のなかでも、私どもの活動に触れてくださいました。

[2007年]3月21日に杉並公会堂で聴いた、東京バッハ合唱団による《マイ受難曲》の全曲演奏は感銘深いものでした。とくに大村恵美子さん指揮ならびに訳詞によって、全曲を力ある日本語で聞くことができたのは格別でした。その圧巻は、ペテロが、女中の問いに対して3回までも その人を知らずとイエスを否認し、その後で鶏が鳴いたときに、外に出て激しく泣いたという場面でした。(193-4頁)

* * *

私の主宰する合唱団は、老若男女を問わず、また宗教・音楽歴も問わず、ただ歌いたいという意志をもつだけの方を無差別に受け入れているので、本を読むときにも、私はまず、これはこういう一般の人が何気なく読んでみて、抵抗なく心の底まで達するものだろうか、と推測し、気遣いながら読んでしまうのです。

そういう点では、この新著は、もっともご紹介しにくい範疇と言わざるをえません。それでも、ここにとりあげさせていただいたのは、このたびの著作が、森野先生ご自身の日常的な研鑽の、多彩で多角的な面からの収録というかたちで、一人格の浮き彫りに接するような気がしたからなのです。このことは、私にとってむしろ、思考の根本的重要性につながるものなのです。

あえて書かせていただくと、先生と同年代の私は、戦中戦後の日本の政治・宗教などの変わり様、一方では旧態依然の無神経、無反省など、細部にいたるまで、身につまされて経験してきました。ただ、この煩瑣で理解に苦しむ、またわずらわしい個々の経過を、ぜんぜん教会とは縁のなかった、無関係なままの、圧倒的多数の日本人が読むと、どんな印象を受けることになるのか、と憂います。教会の歴史も多くの過ちに満ちているのですか

ら、まず理解しようとする前に嫌悪をいただく人たちが多くても、やむを得ないのではないのでしょうか。

* * *

先生は、聖書や内外の神学者たちの文章を引用しながら、「神の民」、「選ばれた種族」等に言及されています。じつは、私はいつもこの「選ばれた」という語に、ひっかかりを感じます。たまたま環境的にキリスト教にやや近かった私は、仏教その他の宗教にうとく、とりわけ易しい翻訳に出会わなかったので、表面的にでも、その他の宗教の遺産のなかに秘められた真理が、果たしてキリスト教のそれに劣るものなのかどうか、判断するすべがありません。

こうして、肝の底では、自分自身の立場を唯一無二のものとし、信じこむ人間たちが集って、国際会議などで、自由・平等・博愛などを表にかかげて、かけ引きするのが実情ですから、きっかけさえあれば、たちまち牙を剥きあうことになります。

私自身がお手本にするものといえば、どこの国の人、どの宗教の人でもなく、世に生まれでて間もない、外界をひたすら信じようとし、頼りすがろうとする幼児であり、成長して知恵をえても、その幼児の純心をしっかりと保っているような人間であります。

今でも、エゴの突き合せから人間は破滅にいたる運命だ、という短絡的な結論を、私はいだいていません。この宇宙を一定の秩序をもって創りだしたのが、神と呼ばれようが、第一原理と呼ばれようが、人間には測り知れない何かの中から私を生み出し、またその中に立ち帰らせてくれる、その人生の過程を、なるべく多くの同志に出会い、交わりながら、心ゆくまで享受したいとねがうばかりです。それについては、勝ちも負けもなく、選ばれたも選ばれなかったもない、というのが私の本音です。

* * *

最後に、平和についてのボンヘッファーの主張を紹介しながら説かれる、先生の文章を引用して、多くの示唆をくださった新著のご紹介に代えさせていただきます。

ボンヘッファーは、「平和」と「安全保障」の違いを取り上げて、「安全を求める」ということは、そこに相手に対する不信感があり、そこから再び戦争が引き起こされる。しかし、「平和」は、あえてなさなければならないこと、それは一つの偉大な冒険的行為である、と語っている。「キリストの平和」は、「安全保障」や「抑止力」によってではなく、「敵意」という隔ての中垣を取り除くことによって創り出されるのである。(280頁)

心ある仲間の方々の、大きな曲がり角に臨むこの一年の活躍を夢見つつ。

[森野善右衛門さんは、日本基督教団信濃町教会牧師、東北学院大学キリスト教学科教員(実践神学)などを経て、現在、日本基督教団関東東教区巡回牧師]